

# 『伊勢物語』における在原業平像

鳴田圭子

## 目次

## はじめに

○はじめに

○本論

### 第一章 史実の中の業平

#### 第二章 政略結婚を嫌う業平

##### 第一節 『伊勢物語』における藤原氏の位置

##### 第二節 十段の解釈をめぐる

### 第三章 『伊勢物語』における在原業平像

#### 第一節 “色好み”とは

#### 第二節 業平像を求めて

##### (一) “泣く”行為からの考察

##### (二) 友人関係からの考察

##### (三) 孤独感

##### (四) 無常観

##### (五) まとめ

○おわりに

『伊勢物語』は、業平らしい人物を主人公として、その一生を描いた恋愛物語集である。これらの話の中を流れているのは、みやびの精神であり、身分を越えた愛情である。理想の男性として、まことの色好みとしての業平が、恋愛生活の中に刻み上げられているのである。平安時代理想とされた『伊勢物語』の中の業平は、どういう人間性を持っていたのであろうか。それを現在の私の感じ方で、私なりに考えてみたいと思ひ、このテーマを取りあげた。物語中には、史実との矛盾があるが、それらにはなるべくとられず、『伊勢物語』の叙述を中心に、考えてみたい。一応、本論では、『伊勢物語』に登場する男を、統一的な性格を持つ一人の人間、業平と考へたい。

論文の進め方としては、まず、資料をもとに、史実の中での業平の位置をとらえ、十段の解釈をめぐる、当時の社会を『伊勢物語』あるいは業平が、どう受けとめていたかを考察する。そして、第三章で、『伊勢物語』に描き出された業平の性格を、形づくっていかうと思う。

なお、『伊勢物語』の引用本文は全て、岩波文庫による。

## 第一章 史実の中の業平

『伊勢物語』は、理想の男性像を追求した文学である、といわれている。男が、「うひかうぶり」をして、「平城の京」で、「なまめいたる女はらから」に「心地まどふ」場面が始まり、最後は、「心地死ぬべく」思って、歌を詠む場面で終わる構成になっており、男の一代記的な性格を持っている。そして、その理想の男性像を創り上げるモデルとなったのが、在原業平である。

業平は、平安京をはじめた桓武天皇の次に即位した平城天皇の孫であり、父は阿保親王、母は桓武天皇の皇女、伊都内親王といった王族である。そのような高貴な身分の業平が、『伊勢物語』の中では、「京にありわびて」又、「身をえうなきものに思ひなして」、あづまの方へと流れていかなければならなかったのは、何故であろうか。京を恋い慕いながらも、より強く東国へと業平を誘ったものは何であろうか。又、読者をして、業平をどのように描き出すことを欲せしめたものは、何なのだろうか。

業平は、天長二年（825年）に生まれ、元慶四年（880年）に、五十六歳で亡くなった。天長三年に、父阿保親王、仲平、行平等と共に在原氏を賜わった。二十五歳で従五位下に叙せられ、三十九歳の時左兵衛権佐の役につき、翌年、左近権少将となり、四十一歳で右馬頭となった。貞観十七年（875年）には、五十一歳で右近衛中将となった。又、後に、相模権守、美濃権守を兼ねた。

業平の祖父にあたる平城天皇は、病身であったため、在位わずか三年余にして、位を弟の嵯峨天皇に譲った。そのうち、先帝である平城天皇の寵を得て、藤原式家の再興をめざしていた藤原薬子は、兄仲成とともに、上皇の重祚を謀って挙兵したが失敗。薬子は自殺し、仲成は射殺され、上皇は剃髪した。弘仁元年（810年）の「薬子の乱」である。嵯峨天皇は反乱の直前、自己の機密を保持するため藏人所を設置し、藤原北家の藤原冬嗣と、巨勢野足を、藏人頭に任命していた。こうして北家藤原一族は、「薬子の乱」を契機に勢力を拡大し、その子良房は、858年、外孫清和天皇の即位とともに、人臣最初の摂政となり、藤原全盛時代を築いていくのである。『伊勢物語』で業平が、恋い焦がれてなお得ることのできなかつた二条后高子も、北家藤原一族の一人であった。

一方、平城天皇の第一皇子で、業平の父である阿保親王は、この事変のため大宰府に流されたが、天長年間には帰京を許されている。親王は御子たちの王号を返上し、ここに在原の姓を賜った。業平は天長二年（825年）の誕生で、翌年、兄行平たちと共に在原姓を賜わり、以後在原氏を称することになる。

こうした歴史的背景を考慮すると、業平が「身をえうなきものに思ひなし」たのは、単に、二条后高子との恋愛に破れたからということだけではなく、もっと、業平の存在そのものに関わる問題からというべきであろう。つまり、北家藤原一族が、王族を退けて、政界に思うままに勢力を拡充していくという現状の中で、業平も例外ではなく、身分不相応の官位しか与えられなかった。そのような京に住むことは、業平にとって、やりきれない事だったのでないだ

らうか。その上、二条后との恋愛も、藤原勢力によって引き裂かれたのであるから、猶のことである。

しかし、業平には政界への執着は見られない。自分を政界の余計者として自覚し、東国へ旅立ったことよって、業平は、現実界の人間から物語の主人公へとなり得たのである。この点で、紀有常・惟喬親王は業平と共通している。彼らは皆、藤原勢力の前になす術もなく、政界から退けられていく宿命を持ち、風流人として生きることを欲した人々である。『伊勢物語』はそのような宿命を持つ人々を中心に、展開していくのである。

## 第二章 政略結婚を嫌う業平

### 第一節 『伊勢物語』における藤原氏の位置

藤原氏が全盛を誇っている時、その陰にあって業平は、それをどう受け止めていたであろうか。ここでは、『伊勢物語』十段の解釈をめぐって、この問題を考えてみたい。

十段を解釈するに当って、まず本節では、藤原氏が『伊勢物語』で、どのように扱われているかを、はっきりさせておきたい。第一章で、『伊勢物語』は、没落していく風流人々を中心に展開されていくと述べたが、では、全盛を誇っている藤原氏はどのような形で登場してくるのであろうか。

紀有常、在原業平、藤原敏行を比較してみると、『古今和歌集』だけに限って言えば、業平三十首、敏行十九首、有常一首がそれぞ

れ入集されている。『古今和歌集』が、当時の優れた歌人たちの手によって、客観的に集大成されたものであるとすると、『伊勢物語』の中で、敏行の歌がわずかに一首しか取り上げられず、有常の歌が意識的に多く編まれているという点には、作者達の何らかの意図があるに違いない。有常は紀氏であったからこそ、より風流人として登場することが望まれ、一方、敏行は藤原氏であったために、風流人として登場することが望まれなかったとは、考えられないだろうか。では、藤原氏のうち、『伊勢物語』の中で歌を詠んでいるのは、敏行だけであるが、一体何故、敏行だけが藤原氏でありながら、歌人として登場することを許されたのであろうか。敏行は業平と同様に、三十六歌仙の一人であり、かなりの歌上手であったことは間違いない。『平安朝文学事典』にも、八宇多朝第一の宮廷歌人で、帝側にあつてしばしば献詠したが、「寛平后宮歌合」「是貞親王家歌合」の開催にも力があつたらしい。また友則、貫之、忠岑ら、卑官の歌人たちの宮廷歌壇進出を助けたのも敏行だったと説明がある。次に、敏行の母が紀名虎の女むすめであることに注目すると、母方である紀氏に強い影響を受けていたと考えられる。又、敏行は、紀有常の女むすめを妻にしており、業平とは義理の兄弟である。さらに言えば、敏行は、南家藤原一族であり、同じ藤原氏でありながら、北家藤原一族の勢力の前に、排斥されていく運命を辿るという事実にも興味を持たれる。

敏行も又、没落していく風流人であったと考えられる。以上述べてきたことから、敏行は藤原氏であったために、優れた歌人でありながら、一首しか歌を詠むことが許されなかった。と同時に、敏行

であったからこそ、『伊勢物語』で歌を詠むことを許されたのである、という二面性を持っていると言えよう。

他に藤原氏が登場する人達を概観しておく、後述するように百一段の良近は、業平が、「あやしき藤の花」の歌を詠むために必要な、場面設定の条件であるに過ぎないし、おほきおとど(良房)も同様に、歌の材料に過ぎない。六段では、国経と基経は、業平の恋を邪魔する鬼として登場する。常行は、七十七段・七十八段と登場してくる。そのどちらも「歌よむ人々」を召しあつめて、けふのみわざを題にて、春の心ばへある歌たてまつらせ給ふ」「人々」に歌よませ給ふ」と、自分では歌を詠まず、人々に歌を詠ませている。『伊勢物語』では、藤原氏は、地位や立場ではいつも、業平の上位にあって、歌の世界(風流の世界)には、全く無縁のものとして設定してある。風流の世界では、地位や権力など何にもならないということであろうか。

ここで、藤原氏の栄華を誉めた百一段の解釈が気になってくる。

『伊勢物語』の作者達は、ただ藤原氏の栄華を称えることをのみ意図して、百一段を設定したのでろうか。問題となる歌は次のようである。

咲く花のしたにかくるゝ人を多みありしにまさる藤のかげかも  
百一段の場面の設定から考えてみる。まず、在原行平の家に「よき酒ありときよて」、風流の宴がもたれる。行平は「なさけある人」であり、瓶には花がさしてある。数ある花の中に、特に「あやしき藤の花」が目につき、それを題にして歌が詠まれる。やがて「よみはてがたに」、行平の兄弟に、厭がるのを無理に詠ませたところ、

前掲の歌を詠んだ。ところが、居合せた人々は、その歌の意味が分らないのである。わざわざ業平に、「おほきおとどの栄花の盛り  
にみまそがりて、藤氏のこと  
に栄ゆるを思ひてよめる」と、説明させているのである。居合せた人々は、一通り歌を心得た人であろうのに、ここでわざわざ解釈させているのは、風流の場にしてはくどすぎて似つかわしくない。又、行平の設けた席上で良房を誉め称えるのは不自然であると思われる。何故なら、行平も業平らと同様、藤原良房の勢力のために政界から退けられ、そのことが行平を須磨にこもらせることになるからである。「古今和歌集」の中の「立ちわかれいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこむ」「わくらばにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつつわぶとこたへよ」の歌は大変有名であるが、行平が登場する時、人々は彼のあわれ深い生涯や、「立ちわかれ」「わくらばに」などの歌を思い浮かべたであろう。その行平の前で、良房の栄華を誉め称える歌を詠ませ、それを解釈までさせているのは、いかにも皮肉めいて感じられる。

百一段も、決してただ藤原栄華を称えることにみに終わっているとは思えない。

## 第二節 十段の解釈をめぐって

本節で問題にするのは、「人の国にても、なほかゝることなむやまざりける」という部分の解釈である。これまでは「かかること」を、好色事とする解釈が広く受け入れられてきている。しかし、それだけではなく、もっと深い意味が含まれているように思われる。

まず、十段の構成のポイントを上げておく。

- 1、京以外の国で起ったこと
- 2、母親が藤原氏であること
- 3、母親が娘を身分の高い人と結びつけようとしたこと

2、3の条件は、京で藤原氏が行なっている自己の勢力拡充のための手段と、よく似ている。つまり、娘を天皇の妻にして、皇室との姻戚関係を深め、一族の娘が生んだ幼い天皇の外戚として、権勢を振るう方法である。この方法は、日本に限ったことではなく、古代中国においても、考え方として広く存在していた。中国の古典文学である白楽天の『長恨歌』に、この典型が見られるので、この部分を引用してみる。

後宮の佳麗三千人

三千の寵愛一身にあり

——(中略)——

姉妹弟兄みな土を列ね

憐れむべし光彩門戸に生ず

遂に天下の父母の心をして

男を生むを重んぜず

女を生むを重んぜしむ

〔白楽天〕(漢詩大系)

『平安朝文学事典』によると、当時、長恨歌が広く愛誦されて、いたことが知られる。

中国古典文学の粹を集めた『文選』と唐代の『白氏文集』とはわが平安朝漢文学の二大柱であった、(中略)『白氏文集』は楽天の存命中に早くも我が国に伝わり(仁明天皇承和五年||八三八)、

天皇を始め公卿大臣から宮廷官史諸婦人に到るまで愛誦愛誦されるようになった。V

このような状況から推測すると、娘を高貴な家からの男の妻にすることに、一族の繁栄を願うという考えは、京以外の国であっても、自然に受け入れられた考えであったと言つてよい。

十段の解釈に入る前に、もう一つ解決しなければならぬ問題がある。それは、何故、業平は、二条后との恋愛に破れたのかという問題である。二条后は、北家藤原一族である藤原長良の娘高子で、清和天皇の妻であり、陽成天皇の母となった人である。

先に述べた、藤原式勢力進出のパターンをもう一度考えてみよう。藤原氏にとって、娘は、将来、天皇になるべき皇子を生むための、大切な財産であった。しかし、そのパターンは極めて偶然的であり、基盤の薄いものであった。もし、藤原一族に娘が生まれなかつたら、もし、娘と天皇との間に、将来天皇になるべき皇子が生まれなかつたら……という不安は、常にあつたと考えられる。そうすると、藤原一族にとって娘は、その地位や権力のすべての基になるものであつたのだから、当然、娘の自由な恋愛は許されなかつたであらう。だから、仮りに、二条后が業平を愛していたとしても、藤原氏が許さないのは当然である。五段では、「あるじきぎつけて、その通ひ路に、夜毎に人をすまてまもらせければ」とある。又、六段では、業平が思い余つて、二条后を盗み出した時、鬼となって業平から二条后を奪い去つたのは、二条后の兄である藤原基経・国経であった。業平には、どうすることもできない。ただ泣くしかなかつたのである。

三段では、業平は二条后に次のような歌を贈っている。

思ひあらば律の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつゝも  
(私を思ってくださいる心がおありなら、雑草の茂ったあばら屋  
でも満足です。あなたと二人、袖を重ねねき敷いて、心暖かに  
そこで共寝をいたしましょう。)

ここには、男女の情に、地位や権力など関係ないのですよという業平の、微かな抵抗が見られる。

しかし、業平が二条后とはとうてい結ばれないであろうことは、業平にも、『伊勢物語』作者達にも、読者にも、共通して、容易に、連想される事柄であった。それが、四段の「本意にはあらで心ざしふかゝりける」である。自分とは正反対の立場にある、北家藤原一族の娘を、それと知っていながら、不本意にも深く愛してしまったのである。ところが、二条后は、「正月の十日ばかりのほどに」どこかに姿を隠してしまった。これはおそらく二条后が、天皇に召されたのであろう。「ありどころは聞けど人のいき通うべき所にもあらざりければ」の部分から、諦めざることをさえてできない業平の、「なほ憂しと思ひつつなむありける」心がよく分かる。以上見てきたように、業平は、藤原一族の政略のために、二条后との間を引き裂かれたのである。業平は心中に、藤原氏に対する、心の通いを無視した政略結婚に対する、反発を抱いたことであろう。

こうして二条后との恋愛に破れた業平は、東国へと旅に出るのである。ところがこの東国でも、京と同じような藤原式勢力進出のパターンを、まざまざと見せ付けられたのである。業平はどんなにか憤慨したのであろう。京だけでなく、このような東国でも、藤原氏

は、政略結婚を企てるとは、呆れたことだという思いが、「人の国にても、なほかゝることなむやまざりける」ではないだろうか。これは『伊勢物語』の作者達が、新興勢力である藤原氏を、強く意識した箇所であると思う。東国という場所の設定にしても、京で起ったこととするよりも柔らかく、読者に風刺を与えるには十分であり、適当である。十段はこのように解釈するのが、最も自然であり、適当であると思われる。

### 第三章 『伊勢物語』における在原業平像

これまで『伊勢物語』の中の業平は、藤原勢力を必ずしも受け入れてはいない旨を述べた。では、ここで『三代実録』『古今和歌集』(仮名序)の中の業平をとらえてみよう。『三代実録』では業平を、「體貌は閑麗、放縱にして拘せず、略才学無し、善く和歌を作る」と説明している。才学無しとは、漢学の才学無しであり、当時藤原氏が重んじた、唐文化に対する、意識的な怠惰であると考えられている。とすれば、業平は自ら官吏となることを拒否し、みやびを求めて歩く、おおらかな貴公子であることを欲したのである。『三代実録』を信ずるならば、業平は、優れたたくましい骨格を持つ、りりしい人物であり、「和歌」が上手であった。またその歌風は、『古今和歌集』に「その心あまりて、ことばたらず。しほめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし。」とあるように非常に情熱的であり、時には、言葉が感情の暗示にしかなり得ないほど、内から溢れ来るものが漂うのであった。これは、「放縱にして拘せず」という業平の

人柄から、生まれてくるものであろう。このような業平は、後宮の女性達にとっては、理想の人物であった。この章では、色好みの考察を中心に、理想の人物としての業平を考えていく。

## 第一節 「色好み」とは

『岩波古語辞典』によると、「色好み」とは次のような意である。  
いろこのみ〔色好み〕

ハイロは美しい容色。また色情の意。コノミは、生来、特に或るものが好きである意。また好きなものを求める意。√気に入る好い女を求めて、あれこれとはたらきかける。

まとめて言うとき色好みとは、「よりよき異性を選び取ろうと、異性から異性へ渡り歩く」ことまたは人（清水文雄「いちちはやきみやび」広島平安文学研究会編『源氏物語その芸術形態』所収）を表わしている。今日では、「色好み」というと、好色、多情という意味あいのみを、思い起こしてしまいがちである。しかし、それは一面であって、大切なことは、異性の選択と交渉にあらわれる「粹」と「美」と「あわれ」の世界であるということは亀井勝一郎氏の述べられたところである。

当時は、一夫多妻制で、男は同時に何人かの女性を、妻にすることができた。このような習慣の中にあつては、一度に多くの女性を愛することは、むしろ美德とされていた。もっと的確に言うならば、多くの女性に愛され、たやすくその意に従わせることのできる男が、理想とされていたのである。

また、結婚が成立するために、重要な役割を担ったのが、歌である。普通、結婚は、男が女の噂を聞くか、あるいは、「かいま見」によって女を知り、歌を詠みかける。女はその歌によって男を判断し、同意すれば返歌によってそれを示し、その上で、結婚が成立するといった、一定の段階を経ることが必要であった。当時の男女にとって、歌上手というのは必須条件であった。これは『伊勢物語』百七段からもよくわかる。男に懸想され、言い寄られた女は年が若いので、手紙もしつかり書けず、うまい言葉づかいも知らない。ましてや歌を詠むことなどできなかった。そこで業平が代作して、女に書かせて贈ったところ、男はその歌にひどく感心し、女に対する思いをますます募らせたという内容である。

これと正反対の内容であるものに、三十九段がある。色好みとして登場してくる源至ではあるが、その歌に続いて本文に、「天の下の色好みの歌にてはなほぞありける」とある。「天の下の色好みと言われている人の歌にしては、いまひとつ不足だ」というのである。はつきり言ってしまうれば、歌が下手な色好みは、まことの色好みではない意を持つている言葉である。

ここで色好みの女について、考えてみよう。先に述べたように、色好みとは、「よりよき異性を選び取ろうと異性から異性へ渡り歩くことまたは人」であるから、三十七段・四十二段で、男がうしろめたく思うのは、女が自分以外の男を通わせるであらう可能性を、持っているからである。通い婚・一夫多妻制・一夜妻等の習慣が、平然と行われる中にあつては、男だけでなく女にも、半自由的な恋愛が許されていたであらうと推測される。つまり女にも、よりよき

異性を選ぶ自由があったのである。「ひとりのみもあらざりけらし」(二段)「人の妻に通ひけるに」(十五段)「又をとこある人」(十九段)などの言葉や、二十一段・四十三段・五十段・六十段・六十二段に見られる女たちの行為から、女が同時に複数の男を愛することもあったことがわかる。

夫の愛情に不満で、他の男について、夫のもとを出て行った女の話として、六十段・六十二段がある。『伊勢物語』の中の類似の話はすべて、女が後におちぶれて、過去の軽率な行ないを悔いといったテーマになっている。

百十三段では、女に出でいかれた男が、次のような歌を詠んでゐる。

ながらぬ命のほどに忘るゝはいかに短き心なるらむ

この歌には、もっと広い心で、私のことを思っていてほしかったのに、思慮の浅い心であることだなあとという思いが、あるのであろう。これらはさらに、『源氏物語』の「雨夜の品定め」の女性批評へと発展していく箇所である。

心ざし深からん男を置きて、見る目のまへに、つらきことありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げかくれて、人をまどはし「心を見ん」とする程に、ながき、世の物思ひになる、いとあぢきなき事なり。(『源氏物語』日本古典文学大系)

『伊勢物語』百十三段も、『源氏物語』「雨夜の品定め」も、どちらも一人の男を心ゆったりと未長く思い慕う女が、よいとされているのである。

ここで『伊勢物語』本文に戻ろう。四十二段の色好みの女は、今

述べたような心ゆったりと、一人を思い慕うような女ではない。しかし男は、この色好みの女を、「されどにくゝはたあらざりけり」と思う。「なほいとうしろめたく」はあるけれど、ざりとて「いかではたえあるまじかりけり」なのである。自分以外にも、男を通わせるような女ではあるけれど、その魅力に惹かれて、愛着を絶ち難い思いにあるのである。

以上見てきたように、『伊勢物語』では色好みの女を、必ずしも否定してはいない。むしろその魅力を認めている。

では、まことの色好みとは、どんなものであろうか。言い換えるならば、まことの色好みの持つ魅力とは、何であろうか。この課題を考えるために、『伊勢物語』で、当時の理想の男性、まことの色好みとして、描き出されている業平像を、浮かび上がらせることにする。この場合、史実との矛盾があっても、一向に差支えない。『伊勢物語』に創り出された、理想の男性像としての業平を、考えればよいからである。

## 第二節 業平像を求めて

この節では、『伊勢物語』に表われている、男の行動や心の動きをもとに、男の性格をまとめていく。

方法としては、いくつかの観点を設定して、その観点毎に性格を考察し、最後にまとめて、業平という一人の人間像を再現してみたいと思う。



(一) 「泣く」行為からの考察

『伊勢物語』の中で、男はすっきりと泣いている。四段の「うち泣きて」という男の姿には、女々しい感じが少しもない。「月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでて」歌を詠み、「夜のほのく」と明くるに、「泣くく婦りにけり」という場面は、幻想的でもあり美しい。こみあげてくる感情のままに泣くという自然の行為は、快くさを感じられる。男は自分の感情を素直に認め、表現することができる人だったのである。

では、ありのままに自らの感情を歌にすることは、男にとってどんな意味があったのだろうか。悲しみを歌に詠むことによって、男は、悲しみを単に悲しみに終らせずに、客観化することができた。詠まれた歌は、男の悲しみの内なる表現であるが、すでに男から独立しており、男は自分の感情を客観的に見ることができた。その時、男は悲しみから少し離れた位置におり、悲しみを超えた、高い位置にあることも可能である。つまり自分の感情そのものを、味わうこともできたのである。

(二) 友人関係からの考察

『伊勢物語』に、友だちが登場する場面は多くあるが、その中で特に、友情をテーマとしたものに、十一段・十六段・三十八段・四十六段の四つの段がある。そのうち三つに紀有常との交情が描かれている。二人の友情は、業平が紀有常の娘を妻にしていること、又

言葉には出さないがお互いに、世に受け入れられないやりきれなさを密かに共感していたであろうことから、並々ならないものであったと思われる。この四つの段について考えてみる。

十一段で、あづまへ行つた時に、男は遠く離れてしまった京の友達に、「忘るなよほどは雲ぬになりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで」と、素直に思いを詠んでいる。自分のことを忘れないうほしいという思いは、当人にとってはひけめでもあり、言葉にするには大変勇気がいったであろう。しかし男はこれを素直に表現できる人であった。だからこそ友達の淋しい思いを暖く受け入れ、四十六段のような優しい歌を贈れたのである。四十六段では、「あさましく対面せで、月日の経にけること。忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の心は、目かるれば忘れぬべきものにこそあめれ」と言ってきた、すっかり弱気の友達に、「目かるとも思はえなくに忘らるゝ時しなれば面影にたつ（いつもあなたの面影は、髻髷として私の念頭に浮んでいるものですから、私はあなたとお別れしているとも思われませんよ）」と、「世の中の人の心は、目かるれば忘れぬべきものにこそあめれ」という一般論をも否定してしまふ形で、友達への心配を思いやっている。

十六段は、有常の妻が出家する時のことである。有常は、妻を「いとあはれと思ひけれど、貧しければ、するわざもなかりけり。」と思ひわびて、日ごろたいそう親しく交わっている友達のところへ歌を贈ってきた。これを見て男は、夜具の類まで心を尽くして贈っている。そこには差し出がましきは全くない。贈り物を受けとった有常は、「よろこびにたへで」うれし涙がふることで、すよと歌って

いる。十六段・四十六段から考えると、男は人に何かをする時、例えば物を贈ったり、歌を贈る時には、受け取る相手の気持ちまでも、思いやらずにはいられない人であることがわかる。しかし、一方、三十八段では紀有常に「君により思ひならぬ世の中の人はいれをや恋といふらむ」と、まるで恋人に對してのような歌を贈った。男は、すっかり心を許している友達に對しては、ちょっと戯れの歌を詠みかけてみる、といった茶目気のある人でもあった。

前に挙げた四つの段以外にも、友達が登場する段がある。前を「友情の對象になる友達」とするならば、「歌友達」にあたる友達との交流が描かれている段である。

「歌友達」とは、業平と一緒に歌を詠み合つて楽しむ友達、業平の歌を聞いて歌の心を理解してくれる友達のことである。歌を詠む時、その発想契機が何であれ、そこには必ず、対人意識が働く。東国下りの場面で、男が「身をえうなき物に思ひなして」、京を逃げるように出て行く時にも、「もとより友とする人が、一緒に行くのである。この友達が男とどういふ關係にあつたかはわからない。とに角、優れた歌人である男が歌を詠んだ時、その歌を理解してくれる人が必要であつた。どんなに優れた歌を詠んでも、それを理解してもらえないのであれば、空しいばかりである。

### (三) 孤独感

ここでは、四十五段・百二十四段を問題にして考えてみる。

四十五段では、まどい来たものの、自分を死ぬほどに思つてくれ

た女と、「死」によって絶對的に引き離された男の心身の状態を、「つれづれとこもりけり」で、言い表わしている。

清水文雄先生のお言葉をお借りするならば、次のようである。

はじめて愛を確認しあつた二人の間柄が、女の死により一瞬にして断たれたため、男の受けた衝撃は、かえつて激しかったと思われるが、「つれづれ」は、そのような瞬間的な激動の状態をさすのでなく、むしろ激動ののちの、空虚な時の流れに身をまかせている男の、「孤独な身心の状態」をさすものと見られる。したがつて、それは、客觀的には、緊張ののちに訪れる、身心の弛緩ないし放心の状態であるといつてよい。これを主觀的・反省的な立場でとらえると、「孤独感」ということになる。

〔王朝女流文学史〕古川書房

このような、どうしようもない孤独を、身にしみて知っていたからこそ、男は、百二十四段で、「思ふことにはぞたゞにやみぬべき我とひとしき人しなれば」と言つたのである。自分という人間は、この世に唯一人なのだと認識した時、男の心は、「思ふことも人にはいわないでおこう。言葉にしたところで、心をすっかり人にわかつてもらへることなどありはしないのだから……」と、自分の内面へと帰っていくのである。男は孤独感を知っている人。そして人に言つてどうなるものでもない、黙つておこうと考える人である。

自分という人間は一人であると自覺した時、又、他人も同じように孤独であることがわかり、孤独感を人間の本質として、とらえることができるのではないだろうか。それでこそ、人の悲しみがわか

り、人の気持ちが分かりきれない自分に気付き、分かたてあげたいという心の動きが、生まれて来るのではないだろうか。

このように考えてくると、男が四十六段で、淋しがつている友達に、優しい思いやりをこめた歌を贈った気持ちだが、ごく自然なことに思われてくる。

#### (四) 無常観

先ず、業平や有常と深い主従愛で結ばれていた、惟喬親王の境遇をもう一度確認しておく。

惟喬親王は文徳天皇の第一皇子である。当然次期天皇になるべき方ではあったが、天皇の第四皇子の惟仁親王が、生後九カ月という赤ん坊のまま、皇太子になってしまふ。惟喬親王の母は紀名虎の女、一方、惟仁天皇の母は藤原良房の女であり、藤原良房の勢力に勝てず、政界から退けられる。若くして出家し、比叡山の麓小野の里に籠った。

『伊勢物語』では、惟喬親王は、業平を大変愛し、業平に慕われ、共に狩に行く。八十二段では、水無瀬の宮のたいへん趣き深い桜の下で、惟喬親王と業平と有常と、そして親しい人々が酒を飲み飲み、歌を詠み合う。業平が次のような歌を詠んだ。

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

この歌について唐木順三氏は、「これは言外に花の如き親王、当然に皇位をつぐべき筈であった親王に対する業平の愛惜と無念とあはれを言っているのである」(『無用者の系譜』筑摩叢書)と解釈し

ておられる。私はこれに無常観も含めて次のように解釈したい。

「世の中に、まったく桜というものがなかったら花の散るのを惜しみ嘆くようなこともなく、春の人々の心はゆったりと楽しいであるうのに……。しかしそれはかなわぬことで、この世におけるすべてのものが、桜の花も、惟喬親王の運命も、すみやかに移りかわって、しばしも同じ状態にとどまることはないのである。」

又、これに応えて、居合せた一人が次のように詠んだ。

散ればこそいとゞ桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき  
「惜しまれて散るからこそ一層素晴らしいのだ。今、世に栄えている良房一門もどうして一体、いつまでも滅びずにいられようか」というのである。「うき世になにか久しかるべき」という無常観は、惟喬親王にも業平にも共通した思いであったにちがいない。そのあとの突然の親王の出家も、あるいは業平らの胸には少なからず予感されていたかもしれない。この親しく仕えた親王が出家した。業平はそれをどう受けとめたのであろうか。それまでの宮中で華やかな生活を思い出し、現在の親王の、「つれづれといものがなく、ておはしまし」の様子を思い比べた時、無常を感じないではいられなかったに違いない。

そして、八十四段で、母の死を予感して、「世の中にさらぬ別れのなくもがな……」と詠んだ時、生あるものは必ず死すという生命のはかなさを、はっきりと認めたであろう。だからこそ百二十五段で自己の死に直面した時、「つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふ今日とは思はざりしを」と、死を「つひにゆく道」として、肯定することができたのである。

## (四) ま と め

多くの女性を愛することのできる男、多くの女性を、たやすくその意に従わせることのできる男、こういう男が、理想的な人格であり、業平もそうであった。

業平は、自分の感情に対して、大変素直であった。悲しければ泣くし、淋しければ友達に、「私のことを忘れなさいね」と、感情を素直に表現することができた。死ぬほどの情熱をもって、女性を恋い慕いました。しかし、我を忘れる位、対象に没入することだけでなく、業平は、歌を詠むことによって、その感情から一歩離れて、自分を含めた場面を客観的に観じることができた。それだから、情趣を解することができたのだ。一つの場面の中に置かれた時、自分がその中でどうあることが最もふさわしいかを、無意識のうちには判断でき、その通りに振舞えた。又、歌や行為によって、場面を、さらに趣きのあるものに演出することも、新しい場面をつくらせていくこともできた。優しく、濃やかな心情を持ち、思いやりの心が深く、歌上手で、場面にふさわしい行為ができる、そんな業平が振舞う場面は、みやびの世界であった。

業平は「色好み」でもあった。男女の情を解することのできる人であった。自らの恋しい思いや、嘆き、苦しみ、恨みをも客観化して、感情そのものを味わうことのできる人であった。そのように、情の深い大らかな人であったので、自分が恋しく思っている人にも、恋しく思っていない人にも、同じように隔てなく振舞うことができたのだ。

また、何かする時、相手のことを思いやらないではいられない人であった。歌を詠み贈る時、何かを贈る時、それを受ける相手の気持ちまでも、思いやる人であった。思いやりの心は、もののあわれをしるということとつながるのであるから、業平は、もののあわれを身にしみて知っていたのである。このことは、業平の置かれた社会的状況からも、孤独や無常観を認識していたということからも、裏付けられる。

そして新興勢力である藤原氏に対して、心中で歌では絶対に負けないという、歌人としてのプライドを、絶えず持っていたのである。政治はなれようであるが、厭世家ではなく、一族の繁栄を心から願っていた人である。

以上、さまざまな観点で業平を見てきたが、ここで第一節で問題にした、まことの色好みについて振り返っておく。

孤独を人間の本質としてとらえ、世のはかなさを、その存在全てで知っていた業平は、他の人の孤独や、はかなさも又、共感し得たのである。そして、共感の姿勢の上に、深いおもいやりの心を持っていた。多くの女性に愛されながら、そのひとりひとりに深い愛情を注いでいる業平には、歌上手であること以前の、一人の人間としての暖かさ、やさしさ、愛、哀しさが感じられる。『伊勢物語』には様々な身分の女が登場するが、「思ふをも、思はぬをも、けじめ見せぬ心」を持つ業平に、人々は、まことの色好み、理想の男性像を思い描いたのであろう。

まことの色好みとは、もののあわれを知ることの上に成り立つのではないだろうか。そして色好みの持つ魅力は、深い人間性である

と私は思う。

### おわりに

私が初めて『伊勢物語』の中の業平と出会った時には、私には「色好み」の意味もわからず、ただ、物語の浮気な主人公としてしか考えられなかった。しかし、何度も読み、いろいろな研究書を読んでいくうちに、どんなに生き生きと一人の人間が描かれているかがわかってきた。私は、業平のおうようさに驚くばかりである。そして、私は、業平が男であったからとか、時代がそうであったからとかを抜きにして、現在にも共通してなお素晴らしい人であると思う。

しかし、私の未熟な考え方で、一人の人間を性格付けてみようとしたこと自体に、無理があったかもしれないし、少ない観点からしか業平を探れなかったことも、不十分であったと思う。今後、もっとさまざまな方向から、業平を見つけ出していきたい。

ただ、この論文を書いたことで、業平という心豊かな人物に出会えたことが、とてもうれししいし、これからも、私の中の「業平像」を大切にしていきたいと思う。

又、長い間、色々のご指導をいただきました先生、本当に有難うございました。

### 参考文献

- 『伊勢物語に就きての研究』 大津有一 有精堂  
『伊勢物語』(日本古典文学全集) 福井貞助教注 小学館

『王朝女流文学史』 清水文雄

『伊勢物語精講 研究と評釈』 池田亀鑑

「いちはやきみやび」 清水文雄

古川書房

『無用者の系譜』 唐木順三

『日本人の精神史』 亀井勝一郎

『平安朝文学事典』 岡一男編

『日本国語大辞典』 相賀徹夫

筑摩書房  
講談社文庫  
東京堂出版  
小学館

### 〔評〕

古来、愛読され続けてきた『伊勢物語』に関する研究論文は、枚挙に暇がない。現在では、とりわけ、成立に関する研究が進み、現『伊勢物語』は、幾人もの手によって、長期にわたって作られたものであることが、定説化しつつある。しかし、この研究成果を踏まえた上での作品鑑賞となると、かえって、『伊勢物語』の本質をつかまえていく。その意味で、虚心に作品に傾注し、全段の把握を先ず心掛けた、鳴田さんの姿勢は正当である。

又、「男」を全て「業平」と仮定し、読者の立場を貫いたのも、出発点としては、致し方ない処置であろう。本論文の圧巻は、第二章第二節である。統一的な「業平像」を、浮き彫りにすることに専心して、初めて得られた、第十段への試解である。

(小林 美和子)